

Ⅱ 博士論文紹介 Ⅱ

姜惠彬 著 『川端康成初期作品研究』

《論文構成》

序章

第一部 モダニズムの展開と方法論の模索

第一章 「或る詩風」論——前衛芸術との関わりの中で——

第二章 「針と硝子と霧」論——無意識への志向——

第三章 『浅草紅団』論（一）——浅草の形容——

第四章 『浅草紅団』論（二）

——〈遊戯〉と〈虚構〉を視座に——

第二部 象徴主義への志向

第一章 「春景色」論——〈詩的小説〉の試み——

第二章 「散りぬるを」論

——〈純粹小説〉との関連の中で——

第三章 「扉」論——〈虚無〉からの解放——

終章

一般に川端康成という作家は、『雪国』などの代表作やノーベル賞受賞時の講演「美しい日本の私」によって、日本の美の表現者という印象を持たれてきた。その一方で、近代リアリズムにおける〈描写〉の自明性が疑問視され小説の方法論が考え直されていた大正期にデビューした川端が、そういった時代的課題にどう取り組んでいるのか、という問題は見過ごされてきた。著者は本論文において、川端の取り組みが表れている初期作品、特に〈芸術家小説〉の考察

を通じて、川端が時代的課題をいかに受け止めて小説を作り出したのかを検討することを目的としている。

第一部では、当時のモダニズムと連動している作品群を取り上げ、同時代の中で川端がどのような認識論と表現理論を獲得していたのかを考察されている。「或る詩風」と「針と硝子と霧」は無意識に注目しており、川端が主体の意識そのものへ関心を向けていたことを示している。『浅草紅団』は語りの視点が統一されておらず、語り手の主体性は保証されていない。初期川端作品においては近代リアリズムの前提である〈主客〉の分離は疑われ、〈主客一如〉が志向されていることが論じられている。

第二部では、〈主客一如〉の実現のため、実践された象徴の方法が論じられている。「春景色」では〈描写〉を避けつつ「赤」という色彩でイメージの喚起を促すという象徴の方法が試みられている。「散りぬるを」では象徴に対する限界意識から〈主客〉というリアリズムの手法の有効性を問い直し、もう一つの象徴の方法を不十分ではあるが試みている。こういった象徴の方法が一方で、〈虚無〉への接近を要請し、創作者が死の危機に直面するという問題を持っていることを著者は論じ、「扉」においてその死から解放され、生に復帰する意志が描かれたと評する。そして川端が獲得していった象徴の方法は、『雪国』に代表されるような後期の長編にも引き継がれていることを示し、初期の模索が川端独自の長編小説構築のために必然的なものであることを論じている。

本論文は初期作品を精緻に読み込むだけでなく、堅実な同時代的考察を行っている。川端研究としては無論のこと、大正から昭和初期の文学研究にも多くの示唆を与える論考であろう。（蓮見洋介）